「神のことば」　　テモテ第二　３：１４～１７

導入

今、私たちは高度に発達した情報化社会の中に生きています。多くの方が、スマートフォンなどを所有し、常に持ち歩いている時代です。どこにいても、メールや SNS によって人と繋がっていて、リアルタイムでいろいろなニュースを知ることができます。なにか分からないことがあれば、すぐにその場で検索して調べることもできます。本当に便利な時代になりました。

いま、私たちは、このような情報化社会の恩恵に与りながら、たくさんの情報に囲まれて生きています。しかし、中には怪しげな情報もあります。たくさんの情報を簡単に得ることができるようになった反面で、それらの信憑性、確かさを確認しなければならないという手間が必要になりました。今の世の中で、本当に信頼できるものは、いったいどれくらいあるのでしょうか。今朝の箇所で、パウロはテモテに本当に信頼できるものについて教えています。「それにしっかりと留まるように」と諭しています。それはいったい何でしょうか。御言葉に学んでまいりましょう。

本論　１．手紙の背景

まず、手紙の背景とパウロの思いについてお話ししておきたいと思います。この手紙は、パウロからテモテへの手紙です。とても評判の良い青年であったテモテは、伝道旅行中のパウロに気に入られ、伝道旅行に同行することになりました。使徒の働きにそのことが記されています。それ以降、テモテはパウロとともに福音を宣べ伝える者となりました。パウロにとってテモテは、命がけの宣教旅行で苦楽を共にした仲間であり、同労者です。手紙の冒頭には「愛する子テモテへ」という非常に親しみを込めた挨拶がありますが、年齢が離れていたテモテは、パウロにとって本当にわが子のようにかわいい弟子でもありました。

４章９節をみると、パウロは「あなたは、何とかして早く私のところに来てください。」とテモテに懇願しています。この頃テモテは恐らくエペソの教会で働いており、一方のパウロはローマの牢獄の中にいました。「何とかして 早く 私のところに来てください」というパウロの言葉はどこか切迫した、切実な響きを感じさせますが、それは恐らくパウロが自分の最後のときを意識していたからでしょう。別のところ(４:6)でパウロは「私はすでに注ぎのささげ物となっています。」と語っていますが、それに続くのは、まるで自らの最後を予感しているかのような次のような言葉です。「私が世を去る時が来ました。私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」（４：６-７）。

また、パウロは当時の教会の状況についても心配していました。誤った教えによって人々を惑わせる者が現れ、信仰から離れてしまう人たちが出て来たのを聞いていたからです。さまざまな問題が生じている中にあって、この先テモテに会って話す機会が自分にはどれだけあるのだろうかと、そんな思いが、最後の時を予感していたパウロにはあったのではないでしょうか。もしかしたら、テモテにはこのまま会えないのかもしれない。こういう思いの中で書かれたのが、この手紙であり、また今朝の御言葉の背景です。パウロには、是非ともテモテに伝えておきたいことがありました。また、できることならもう一度テモテに会って、励ましを受けたいという気持ちもあったと思われます。

２．テモテへの勧め

２．１．とどまりなさい

では、14 節から見て参りましょう。14 節、「けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。」今朝の箇所でパウロが語りたかったのは、このことでした。「学んで確信したところ」にとどまるということです。

しかし、14 節のはじめの「けれども」という言葉が、真理から外れていってしまった人々がいることもまた示しています。彼らは留まることができずに道を外れて行ってしまった人々です。目新しい教えや、自分の耳に心地よい話を求めて、いつの間にか元の教えから離れ、学んで確信したところにとどまることができなかった人たちです。

今の世の中でも、こういうことはよくあるのではないでしょうか。いわゆる似非科学や都市伝説を生みだしているのは人間の深層心理であると言われます。人々の不安な気持ちが、なにかしらの説明を求め、それにこたえる形で生み出されてくるものが世の中にはあります。人は分かり易い説明を求めます。そういう説明を与えてくれるものを求めます。場合によっては、それこそが正しい真理であるかのように思い込んだり、信じてしまうこともあるでしょう。たとえどんな形であっても、説明がつくと、なんとなく安心するということはないでしょうか。そうすることで、私たちは自分が置かれている不確かで危うい状況をコントロールしたいと無意識に願っているのかもしれません。目新しいことや、分かり易いことに流れやすいのが人間の思いです。だからこそパウロは、学んで確信したところにとどまるようにとテモテに勧めました。

２．２．誰から学び、何から学んだか

次にパウロは、学んで確信したところにとどまるべき理由として、２つの事を挙げています。14 節の続きを見ましょう。「(14 節）あなたは自分がだれから学んだかを知っており、(15 節）また、自分が幼いころから聖書に親しんできたことも知っているからです。」

一つ目の理由は、「誰から」学んだかということに関連しています。テモテは、祖母ロイスと母ユニケという、聖書にも名前を残している立派な信仰者から教えられて、その信仰を受け継ぎました。あるいは、パウロやマルコ、ルカなどからも直接話を聞いていたはずです。彼らは、後に新約聖書となっていく手紙や書物を書いた人たちであり、信頼できる人たちでした。テモテが学んできたのは、誰が言い出したのかもわからないような出処の分からないものではありませんでした。逆に、今私たちの周りにある情報は、誰が言い出したのか分からないことが多いように思います。それはどんなに分かり易く、説得力があっても、噂でしかないということを忘れてはいけません。

二つ目は、「何から」学んだかということに関連しています。テモテが学んだのは、聖書からでした。幼いころから聖書に親しみ、聖書から教えられてきました。ここで「聖書」と言われているのは、直接は旧約聖書のことを指しています。この時代にはまだ新約聖書はまとまった形になっていませんでした。ですからパウロが 15 節で、「聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。」といっているときの「聖書」も旧約聖書のことを指しています。つまり、旧約聖書はイエス・キリストをについて語っており、旧約聖書によってイエス・キリストを信じ、救いを受けることができると、パウロはここで主張しているのです。

新約も旧約も両方とも知っている私たちからすると、イエス様を証ししているのは新約聖書の方だろうと思うのですが、もともとイエス様についての証しを記していたのは旧約聖書です。新約聖書は、いうならばイエス・キリストこそ旧約で語られていたメシアであるという驚きと発見を、きちんと形にしたものです。

このことについては、イエス様も同じことを言っておられます。「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証ししているものです。」というヨハネ５章３９節の御言葉で、イエスさまが「わたしについて証ししている」と言われた「聖書」は、旧約聖書のことです。

２．３．聖書の信頼性「霊感」

つづく 16 節では、パウロは聖書の権威の源について語っていきます。16 節 「聖書はすべて神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」聖書の権威は、神の「霊感」によっている。それがパウロの主張です。「霊感」といわれても、なかなかピンと来ないかもしれません。「霊感」と訳されているギリシャ語の言葉の元々の意味は「神から吹き出でたもの」です。脚注付きの聖書をお持ちの方は、16 節の脚注に「神の息吹による」という直訳があるのが分かると思います。「息吹」は、神様の口から吹き出されるものです。神から発せられた言葉であるということです。「霊感」というのは、不思議な力や、その神秘的な性質を強調するというよりも、もともとは「神から吹き出た」という意味であって、その起源が神にあるということを説明する言葉なのです。

パウロは、「誰から」また「何から」学んだかということを問題にしてきました。それは、テモテが学んできたことがどこから来たものなのかという起源に関するという点で一致していました。そしてパウロは、「霊感」という言葉を使って、最後に聖書の御言葉の起源が神にあることを述べているわけです。聖書の言葉が信頼できるのは、それが神からのものであるからです。聖書の御言葉は、究極的には神様から出た、「神のことば」であるということです。信頼性という点で、これ以上のことはありません。「神のことば」は確かです。

ところで、先ほどは、ここで語られている聖書というのが、旧約聖書のことに触れましたが、「霊感」ということに関して言うなら、聖書 66 巻のすべて、すなわち新約聖書もまたすべて神の霊感によるものであるといことを申し上げておきたいと思います。新約聖書は、旧約の中に記されていた神様のご計画を明らかにし、その救いの計画の中心が、イエス・キリストであることを、より鮮明に明らかに示したものであって、内容は旧約聖書と完全に調和しています。つまり、イエス・キリストこそ救い主「メシア」であると信じる者にとっては、新約聖書もまた、この救いの計画をたてられた、同じ神様から出ているものであって、神の霊感によるものであると信じることができるのです。

２．４．聖書の有益性

16 節の後半では、聖書の有益性が語られています。すでに、聖書がイエス・キリストを証しし、キリストを信じさせて、救いを与えることができるとパウロは述べていましたが、ここでは救いを受けた私たちキリスト者にとっても聖書が有益なものであることを教えてくれています。

ここに挙げられている 4 つの項目「教え、戒め、矯正、義の訓練」について、ある本は、次のように整理して説明していました。まず、始めの 2 つ「教え」と「戒め」は、いわば「教理」的な知識で、〇〇しなさいという積極的な「教え」と、〇〇してはいけないという消極的な「戒め」に分かれる。そして後半の 2 つは、「実践」に関することで、「矯正」というのは、良くないことが正されるという消極的な実践であり、「義の訓練」は良いことがますます良くされるという積極的な実践である、という具合です。教理（知識）と実践にうまく分類しつつ、教理だけでも、実践だけでもなく、両方において漏れなく、聖書は有益であるということを述べているということです。結局何が言いたいかというと、知識においても実践においても、積極面でも消極面でも、つまりは私たちの生活全体にとって、聖書が有益であるということです。

聖書の御言葉は、この不確かな世の中にあってどう生きるべきかについて、私たちを教え、戒め、矯正し、訓練することができます。そして神の御言葉である聖書は、実際に私たちを造り変える力があります。日々、御言葉によって教えられ、心が照らさる中で、私たちは内側から変えられて、新しい者とされ

てゆきます。自分の力ではいくらもがいても変わることができなかった人が、御言葉によって変えられていく姿を、私たちは何度も見てきたのではないでしょうか。そして、何よりも自分自身がその中のひとりであるはずです。

17 節ではこのように述べられています。「神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられたものとなるためです。」御言葉を通した神様との日々の交わりによって、私たちは養われながら、成長し、良い働きに「相応しい者」「十分に整えられた者」へと変えられてゆきます。自分は、そんな立派な信仰者ではないと思われる方がいらしゃるかもしれません。しかし、これは神様の御業でもあります。神様は、御言葉に従う者のために、良い行いをもあらかじめ備えてくださるお方です。また、私たちの弱さを通してもお働きになることができ、そこに栄光を現してくださるお方です。教えられたところにとどまり、御言葉によって歩むとき、神様が私たちのことをふさわしく整えてくださるのです。

聖書は「神のことば」であるがゆえに、真に有益な力をもっています。まず、聖書は私たちに知恵を与え、イエス・キリストを信じることができるようにします。その信仰を通して私たちに救いを与えることできます。さらに、救われた者をよく整え、神さまが用意されておられる良い働きへと、ふわしく、十分に、整えることができます。そうやって養われてゆく中で、私たちは信仰者として成長してゆくことができ、変えられていきます。御言葉は、「神のことば」であるがゆえに、力があります。

３．聖霊の働きと信仰

さて、今日の御言葉を通してパウロは、私たちに聖書について大切なことを教えてくれました。「神のことば」である聖書の信頼性と有益性ということについて、とくに注目して見てきましたが、聖書が「神のことば」であるということを考える上で大切なこととして、「聖霊の働き」あるいは「信仰」について挙げておきたいと思います。

聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできない（Ｉコリント１２：３）とあるように、聖霊の働きがなければ、パウロの言う信仰の救いを受け取ることはできません。聖書の御言葉を「神のことば」であると認め、受け取るには、信仰が必要なのです。御霊の働きと信仰は、どちらが先で、どちらが後というものでははありません。神様の側からの恵みとしての御霊の働きと、私たちの側の応答としての信仰とが一体となるとき、御言葉は私たちを変える「神のことば」となります。

真実なお方である神様は、いつも恵みをもって私たちに臨んでいてくださり、その愛を私たちに示そう、恵みを与えようとしてくださっています。御言葉は、信じる者に働きます。この神様の恵みを受け取るために、私たちは御言葉のもとにへりくだり、信仰をもって聖書が神の御言葉であると信じることが大切です。

結論　私たちにとっての「神のことば」

聖書の御言葉は「神のことば」です。世の中にあふれているような私たちの潜在的な不安や願望から生まれたものではありません。「神のことば」である聖書は、私たちにイエス・キリストによる救いをもたらすことができます。私たちを教え、戒め、矯正し、訓練し、神の働きのためにふさわしく整えることができます。私たちを変える力を持っています。

それは、聖書の御言葉が、神様の口から出た、「神様の言葉」であるからです。その確かな御言葉が、私たちには「聖書」という形で与えられて、使徒たちの時代から、その弟子たち、またその弟子たちと伝えられて、私たちのところにまで、確かなものとして届けられました。神様は、その確かな御言葉である「神のことば」を、今、既に私たちに与えて下さっているのです。

それでは、私たちは、この聖書の御言葉の確かさを、どれだけ真剣に受け止めているでしょうか？日々、接している聖書の御言葉は、私たちにとって本当に「神のことば」となっているでしょうか？御言葉は、今日を生きる力を与え、喜びや驚きを与えてくれていますか？いつのまにか「神のことば」に期待することをやめてしまってはいないでしょうか？

パウロの時代、新しい教えに走り、教えられたところに留まることができなかった人々は、それが「神のことば」であることを見失ったのです。「神のことば」に期待し、「神のことば」として味わうことを忘れてしまったから、そこに留まることができなかったのではないでしょうか。その結果、人から出た言葉や耳障りのよい言葉を求め、私たちを本当に立たせることできる「神のことば」から離れて、いつ倒れてもおかしくない者となってしまいました。どんな暗闇や谷底にあっても、私たちを立ち上がらせることができるのは、ただ神様だけです。

私たちは、この真の神様の言葉に、日々、養われ、その恵みのもとに生かされています。「神のことば」に聴く一人、二人が集まるところが教会です。教会は、「神のことば」に生きることでキリストを証ししてゆきます。その教会には、御霊の働きがあり、主イエス・キリストのご臨在があり、生ける真の神様の余りある祝福があります。この生ける真の神様の言葉を、今再び「神のことば」として聞き、信仰をもって受け取りましょう。そして、ともに従って参りましょう。